

Nos. 25, 26

(Mar. 1975)

日本産タマムシ科概説 (13)

黒 沢 良 彦

43. *A. sinensis* J. THOMSON, 1879 オオムネアカナガタマムシ 分布: 日本 (本州?), 満洲 (南部), 中国, 北ベトナム。体長 10mm 内外。頭胸部は美しい紅色ないし金赤色, 雄の顔面は金色を帯びる。翅鞘は黒色。内側隆線は不明瞭。一見, クロナガタマムシの北方型 f. *mikado* OBENBERGER に似ているが, 前胸背の形や顔面の凹みが異なる。加害植物は未知。

三輪勇四郎, 中条道夫両博士が日光で得られたと云う標本に基づいて記載した, ムネアカナガタマムシ *A. pseudimitans* MIWA & CHÔJÔ, 1940 は間違いなく本種のシノニムである。日本では極めて稀な種類らしく, 私は確実に日本で採集された標本を検したことがない。中国では比較的普通な種類であるらしい。華南からトンキン (北ベトナム) にかけてのものは翅鞘が緑を帯び, 亜種 *splendidicollis* FAIRMAIRE, 1888 と云う。トンキンの Na-lang から記載された, 亜種 *lameyi* OBENBERGER, 1924 は *splendidicollis* のシノニムである。

44. *A. sinuatus* (OLIVIER, 1790) アカバナガタマムシ 分布: 日本 (北海道, 本州, 四国, 九州), ヨーロッパ, 北アフリカ。体長 8~11 mm。全体銅赤色, 頭部は金色または唐金色を帯びることがあり, 雄の顔面は青銅色, 腹面も青銅色。深山から亜高山帯にかけてのナナカマドにつく種類で, 同一場所でもかなりの数を見かけることがある。多少の色彩変異があり, 紫黒色を帯びたものや青緑色を帯びたものがあり, 前者を ab. *yokoyamai* IGA と云う。

原亜種は英国を含むヨーロッパ全土と北アフリカに広く分布する種類で, やはりナナカマド類につくと云うが, 他にサンザシや洋梨にも加害すると云う。洋梨の苗について北アメリカにも渡り, 大害虫になっている。日本では, まだ梨類其他のバラ科の果樹に加害すると云う記録はないが, 警戒を要する種類ではある。

日本産のものは, 原亜種に比べ, 前胸背側縁後方の波曲が強く, 腹面の銅青色が強いので亜種として

区別出来る。日本とヨーロッパ間に既知産地がないが, 西シベリアの *Jenissejsk* から記載された *A. jeniseiensis* OBENBERGER, 1924 の模式標本が本種の小型の雌と思われるものであるので, かならず東シベリアや朝鮮からも発見されるであろう。北海道からの記録を欠いていたが, 私は定山溪産の 1♂ (26. vii. 1970, 畑山武一郎採集) を検した。

日本産の種名は従来著しく混乱していたので, この機会にその経過を述べておく。

本種を最初に日本から報告図説したのは故平山修次郎氏で, 氏の「原色甲虫図譜」第27図版18図にアカバナタマ (変種) *Agrilus viridri* LINNAEUS var. の名の許に長野県入笠山産の「雄」(実際は雌) を図示してある (1940)。これは三輪勇四郎博士の同定によるものである。一方, 三輪勇四郎, 中条道夫両博士は樺太小沼から同じ *Agrilus viridri* LINNÉ, var. を記録された (日本の甲虫, 3巻2号, 74頁) (1940)。しかし, *Agrilus* 属の中には *viridri* と云う種類はなく, LINNÉ の記載したタマムシの中にも全く見当たらない。この誤は, 三輪博士が, 樺太産の銅赤色のナガタマムシを J. OBENBERGER に送って同定を求められたのに対し, *A. viridis* L. var. とした同定ラベルが付いて返送されて来たものを, OBENBERGER の字が余りに達筆であったために *A. viridri* L. var. と読み誤ったものと考えられる。事実, OBENBERGER の筆記体は乱暴な字体で判読するのに苦しむ場合が少なくない。しかし, *Agrilus viridis* (LINNÉ, 1758) は *Agrilus* 属の模式種であり, ヨーロッパに広く普通にいる種類であるので両博士がもう少しタマムシに精通しておられたら, この様な無智な間違いをされることはなかったであろうし, 引いてはその後の混乱を惹起することもなかったであろうと悔まれる。上記樺太の小沼産の *viridis* が銅赤色を帯びた個体であったために, 三輪博士は平山氏から本州産の標本の同定を求められた際に, 樺太産と同一種と誤り, *A. viridri* LINNÉ var. と返答されたものと思われる。平山氏は

これに「アカバホソタマ」と云う新和名を付して図説したのであろう。伊賀正汎氏と私はこの誤に気が付き、本種に当る記載を探した結果、樺太大泊産の♂と小沼産の♀によって記載された *A. sachalinensis* OBENBERGER の記載が本種によく当るので、これを日本産のものに用いることにし、伊賀氏は保育社の「原色日本昆虫図鑑上」の第4図版第49図にこの種名で図示し、長野県浅間山産の青または紫色を帯びた黒色のものに *ab. yokoyamai* IGA, 1955 と命名した。私はその後、玉貫光一氏から樺太産の真の *sachalinensis* OBENBERGER の標本を頂き、これが私たちがアカバナガタマムシと称している種類とは異なる別種であることを知り、北隆館の「原色昆虫大図鑑Ⅱ、甲虫篇」では第77図版第10図に独立種として、*A. yokoyamai* IGA の種名で図示しておいた。しかし、1973年のヨーロッパ旅行の結果、前記の通り、*A. sachalinensis* OBENBERGER, 1935 は *mendax* MANNERHEIM, 1837 の亜種であり、私が *A. yokoyamai* IGA, 1955 とした種類はヨーロッパに広く分布する *A. sinuatus* (OLIVIER, 1790) の亜種に過ぎないことを確認した。従って、日本産のもの種名は *A. sinuatus yokoyamai* IGA, 1955 とするはずであるが、*yokoyamai* IGA, 1955 は紫黒色の色変りの個体に与えられた異常型名であるために厄介な問題を生じることになった。ヨーロッパの原亜種の全く同様な色変りについてはすでに *ab. cejkai* OBENBERGER, 1933 と云う異常型名が与えられているのである。そこで、私は亜種名には *yokoyamai* IGA, 1955 を残し、青または紫を帯びた黒色の色変りには、必要があれば *ab. cejkai* OBENBERGER, 1933 を用いた。

45. *A. sospes* LEWIS, 1892 シロテンナガタマムシ 分布：日本（北海道、本州、九州、対馬）、朝鮮。体長5～8mm。紫銅色、雄の顔面は銅緑色、翅には各3個の白斑があり、翅端部は白銀色短毛でおおわれる。内側隆線は極めて微弱かまたは全く欠く。下側隆線は側隆線と後方でも合しない。

肥後(熊本県)の湯山産の4頭に基づいて記載された種類であるが、大英博物館にはその中の1♂(10～14. v. 1881, Yuyama)がタイプとして残っているだけである。幼虫はケヤキに被害し、成虫も5～7月にケヤキの伐木に集まる。本州と対馬では普通種であるが、九州では、模式標本の産地であるにもかかわらず、産地も限られ、個体数も少ない。四国にも産するものと思われるが、私は確かな標本を検していない。北海道からは確かな記録がないが、水野耕平氏が1943年に北海道函館付近赤沼から記録したコガネナガタマムシ *A. fortunatus* LEWIS が本種に当るのではないかと考えていた。当時同標本を同定した大阪の研究者等は両種を混同していたからである。しかし、その後久しくこれを確かめる機会がなかったが、大英博物館に *A. quadrisignatus* MARSEUL と同定された葎菜沼産の G. LEWIS 採集

の本種1頭が保存されているのを見出し、やはり本種が少なくとも北海道の半島部には分布していることを確かめた。

本種の同定に当って、常に問題になるのはシベリアから記載された、上記の *A. quadrisignatus* MARSEUL, 1865 との異同である。後者はパリ国立自然科学博物館にあるタイプ標本を含むヨーロッパの博物館の標本を調べた結果では、日本産のに較べて、小型で色彩が明るく、短いが弱い内側隆線を現すなどの相異がある。分布は、シベリア東部、満洲、中国(北部)に及んでいる。中国北部から記載された亜種 *lama* OBENBERGER, 1935 は、多少赤味の強い小型の雄1頭で記載されたもので、区別する必要はない。「日本」から記載された亜種キノシタナガタマムシ *kinoshitae* OBENBERGER, 1936 は、雌1頭で記載され、故木下周太博士の名を冠したものであるが、間違いなく *sospes* LEWIS そのものであり、*quadrisignatus* ではない。また、朝鮮京城から E. GALLOIS 氏採集の1雄に基いて記載された *A. quadristictulus* OBENBERGER, 1940 も *sospes* と同一種である。従って、*quadrisignatus* と *sospes* の分布境界は北朝鮮にあるのではないかと考えられるが、この地域の標本を見ていないので、両種の異同を論じるにはまだ材料不足である。

46. *A. spinipennis* LEWIS, 1892 ケヤキナガタマムシ 分布：日本(本州、四国、九州)。体長10mm内外、頭胸部は銅赤色、雄の顔面は緑色。翅鞘は黒色、雌では翅鞘の後方まの所の会合部に灰色の不明瞭な毛斑があることが多い。翅端は鋭い棘状に終る。幼虫はケヤキにつくが、ハルニレにも被害すると云う。LEWIS の原記載には1880年5月24日に横浜と相模大山との間でケヤキの倒木に沢山見られたと記してある。大英博物館にある模式標本は2頭だけで、完模式標本は雄、24～26. v. 1880, Oyama のラベルが付いている。本州では各地に普通な種類であるが、四国、九州では少なく、代ってムネアカナガタマムシ *A. imitans* LEWIS の方が多くなって来る。国外の分布にカシミールと云う記録があるが、朝鮮、中国、台湾などには全く記録がなく、私も実際に確めたことはなく、これらの地域を越して、ヒマラヤ西部のカシミール地方に産すると云うのは、はなはだ疑わしい。カシミールは分布域から除外した方がよいであろう。従って、目下の所、日本特産種と云える。故松村松年博士の「日本昆虫図解」第3巻、106頁や故加藤正世博士の「原色分類日本昆虫図鑑」第9巻などでは、種名が *bispini-pennis* となっているが、これは松村博士の感違いによる誤りで、*spinipennis* が正しい。日光産の標本に基いて記載された *A. dentiapex* OBENBERGER, 1940 は本種の頭胸部が、多少金緑色を帯びた、単なる軽度の色彩変異に過ぎず、区別する必要は全くない。(国立科学博物館)

## 北日本におけるフタオビミドリトラカミキリの分布

大野正男

フタオビミドリトラカミキリ *Chlorophorus muscosus* (BATES) は、1873年、Hiogo (兵庫) を模式産地として記載された暖地性のカミキリで、日本(本州、飛島、粟島、佐渡、舩倉島、冠島、隠岐、伊豆諸島、小笠原諸島、四国、土佐沖ノ島、九州、幸島、対馬、および種子島、屋久島を含む琉球列島)、朝鮮半島、うつ陵島などに分布することが知られている。しかし、本州中部以南にはかなり広く分布し、その個体数も多いのに、北日本においては既知産地が少なく、特に太平洋沿岸地帯には全く産地の記録が見られない。本稿では、主として北日本における本種の分布状況を概観し、その分布型についてかんたんに触れることにしたい。

本稿を草するに当たり、「Larva」誌、「進化」誌などの入手にお力添えをいただいた福田 彰、奈良典明の両氏並びに貴重な文献のご恵送に与った馬場金太郎、板垣輝彦、松枝 章、白畑孝太郎の諸氏に対し、ここに厚くお礼申し上げる。

### 1. 既知産地のまとめ

石川県：海老原・鶴飼(1969)により、能登半島の輪島が産地として報告されているが、その他、松枝(1968)の舩倉島からの記録もある。恐らく能登半島の沿岸地帯には広く分布しているのであろう。

富山県：本県からは正式に記録されたものはないらしく、田中忠次氏の県産カミキリ目録(1953)や富山県産昆虫目録(1971)にも本種を見出すことができない。しかし、富山湾周辺の海岸地帯を探せば必ず発見できると考えられる。

新潟県：新潟県本土では、横田(1949)による西浦原郡浦浜村五ヶ峠の記録が最初で(1944年8月に1♂)、その後、同郡巻町(樋熊1953)、能生(馬場他1953)、胎内川下流域(馬場1972)などからの記録もみられる。能生では1972年7月、筆者も1頭を採集している。

佐渡からは、新潟高博物同好会(1937)によって宿根木、金北山から報告されたのが最初で、この記録は本土における横田の記録よりも早い。ここではかなり普通に産し、その後も宿根木(小池1954)、大倉・願・小田(小池1967)、戸地川・石花川・金北山(椿1970)などからの報告があり、筆者もまた大佐渡地方の各地で本種を得ている。

本種はまた粟島にも分布し、樋熊(1952)によって最初に記録された。これは1943年と1951年の資料に基づいたものであるが、その後の報告(1964)によると1959・1961年の両年にもかなりの個体が採集されている。筆者も1963年、同島を訪れたとき本種を採集することができた。

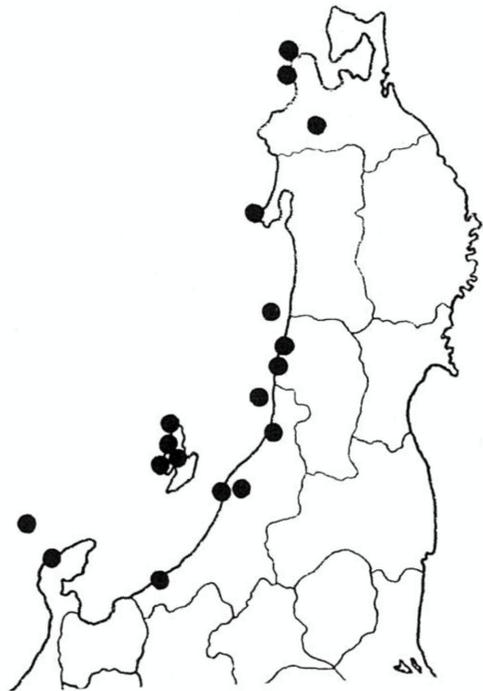
山形県：山形県本土からは比較的最近まで未知で

あったが、黒沢・白畑(1964)により、まず加茂から記録され、次いで板垣(1973)により小波渡から報告された。庄内の沿岸地方には広く分布しているようである。

本土からの記録は上記の如く、比較的新しいが、飛島からはかなり古くから知られている。すなわち、金井・石黒(1940)による記録を最初とし、その後も白畑(1950)、白畑・黒沢(1972)、板垣(1973)などの報告に散見される。三崎山辺りに多いらしい。

秋田県：本県からは今まで本種の記録されたことはないようであるが、筆者は、1962年男鹿半島の調査をしたとき、8月3日、戸賀の海岸で本種5頭を採集することができた。この地方にも少なくないようである。恐らく海岸地帯を探してみたら、男鹿半島以外でも発見されるであろう。

青森県：最近、田添(1973)が竜飛岬に近いほろ内で本種を採集、新産地として報告されたが、青森県にはかなり以前から本種の分布が知られているので、この報告が初めてではない。阿部による1958、1959年の記録がそれで、1958年の報告では南津軽郡平賀町の阿蘇岳(1956年8月3日、阿部採集)と北津軽郡小泊村下前(1957年8月4日、工藤恭三採



北日本におけるフタオビミドリトラカミキリの既知産地

集)が、また1959年の報告では津軽半島の竜飛岬(採集年月日が記されていない)が、それぞれ産地として挙げられている。したがって、田添氏の記録は青森県における4番目の記録ということになる。

青森県における本種の記録はすべて日本海側に偏在しており、夏泊、下北、八戸地方から全く知られていないことは興味深い。

岩手・宮城・福島・茨城の各県: 神奈川や千葉の海岸地帯にはかなり普通に産し、東京都区内の公園(例えば芝離宮など)でも稀でないのに、どういふ訳か茨城県に入るとぱったりいなくなってしまう。日置正義(1973)、川島保夫(1973)、久保田正秀(1973)などによる茨城県産カミキリ目録にも本種の名は全く見出すことができない。福島・宮城にはカミキリムシの見るべきリストがないので何ともいえないが、岩手県の場合、竹内誠一(1940)による岩手甲虫誌をみてやはり本種の記録は含まれていない。茨城県から岩手県に至る諸県には、どうも本種が分布しない公算が強いようである。

## 2. 分布の北限はどこか

本種の北限は、長い間、山形県の飛島ということになっていたが、その後、秋田・青森などにも新産地が発見されたので、飛島を北限として扱うのは誤りである。結局、北海道に分布していないということであれば、本州北端の竜飛岬をもって分布の北限とみるのが妥当であろう。

しかし、不確かな情報ではあるが、筆者は北海道の奥尻島で本種が採集されていることを聞いている。もし、これが事実であるなら、本種の分布域は更に北にのびることになる訳である。

## 3. フタオビミドリトラカミキリの分布要因

本種の生息地は、北日本ではもちろん、西南日本においてもほとんど沿岸地帯に限られている(青森県平賀町のような例外もない訳ではない)ので、大体において海洋気候を好むカミキリと見ることができよう。しかし、本種の分布域の拡大は、海岸伝いに連続的に行なわれるよりも、幼虫を含む材が、海流によって運ばれ、不連続に拡大されることの方が、より一般的であるように考えられる。同じように海洋性の気候下にありながら、茨城県から青森県に至る太平洋側の沿岸諸地域に本種の見られないことが何よりの証拠である。つまり、日本海側では、年間を通じて対馬海流が北上し、暖地性の本種をその沿岸諸地域に供給しやすい条件にあるのに、太平洋側では、南下する親潮が卓越し、西南日本からの流木など漂着しにくい条件にあるからということである。対馬海流の影響はうけるが、気候の上ではより寒冷な条件にある奥尻島において本種が発見されれば、この考えはさらに有力な根拠をもつことになる。

## 4. 文 献

- 阿部 東 (1958) フタオビミドリトラカミキリの北限と新産地. 進化, 10(1): 7.
- 阿部 東 (1959) フタオビミドリトラカミキリ. Larva, (11): 9~10.
- 馬場金太郎 (1972) 新潟県北部・胎内川流域の鞘翅目. 「飯豊山塊・胎内渓谷の生物」: 195~240.
- 馬場金太郎 他3名(1953) ヒメハルゼミの北限地帯能生の昆虫相を探る. 越佐昆虫同好会々報, 7(3): 83~85.
- 海老原裕之・鶴飼秀有(1969) 1968年度夏期宿舎に於ける輪島の生物・天牛類. 動植物研究会報, (15): 75.
- 林 匡夫 (1955) 南方系天牛類の分布. 「原色日本昆虫図鑑・甲虫篇」: 76 (保育社).
- 樋熊 清治 (1952) 粟島の斑みようと天牛. 越佐昆虫同好会々報, 6(4): 128~132.
- 樋熊 清治 (1963) 越後本土に於ける天牛2種の新たな記録. 同上, 7(1): 25.
- 樋熊 清治 (1974) 生物地理学的に見た粟島の昆虫相. 長岡市立科学博物館研究報告, (3): 1~132, 10 pls.
- 板垣 輝彦 (1973) 山形県置賜地方の昆虫類. 第1集: 1~49, 4 pls, (自刊).
- 金井 茂・石黒秋生(1940) 山形県飛島の昆虫相(第一報). 自然研究, (8): 23~34.
- 小池 寛 (1954) 新潟県天牛科総括(2). 越佐昆虫同好会々報, 8(1/2): 11~24.
- 小池 寛 (1954) 佐渡島の天牛. 佐渡博物館々報, (16): 4~16.
- 黒沢 良彦・白畑孝太郎(1964) 昆虫類. 「朝日連峰」: 185~202.
- 松枝 章 (1962) 能登半島のカミキリムシ. とっくりばち, (12): 1~4.
- 新潟高博物同好会 (1937) 続佐渡島産昆虫総括. 自然研究, (6): 45~63.
- 白畑孝太郎 (1950) 孤島飛島紀行. 新昆虫, 3(5): 154~155.
- 白畑孝太郎・黒沢良彦(1972) 鳥海山, 飛島の昆虫類. 「鳥海山・飛島」: 218~262.
- 田添 京二 (1973) 竜飛岬のフタオビミドリトラカミキリ. 月刊むし, (26): 54.
- 椿 博子 (1970) 佐渡金山におけるカミキリムシの採集記録. 千葉敬愛短大生物研究会々報, (2): 57~58.
- 横田栄三郎 (1949) 新潟県西蒲原郡産の注目すべき天牛. 近畿甲虫同好会々報, 4(1): 4.

(埼玉県入間郡鶴ヶ島町)

## ○ホソキカワムシの採集例

ホソキカワムシ *Hemipeplus miyamotoi* H. KAMIYA は従来、奄美大島から記録されているが、目立たない種類なので、その採集報告はあまり聞かない。幸い筆者の手に同島産の本種が1頭あったので報告しておく。

1頭, 奄美大島名瀬, 10. iv. 1974, 高橋隆信採集。  
また、同一種と思われるが、前胸の黒くない個体が石垣島で2頭採集されているのでこれも併せて記録しておく。

2頭, 石垣島オモト岳, 9. v. 1974; 23. vi. 1974, 田村 修採集。(和歌山県楠本中学校, 的場 績)

日本産 *Pidonia* 属の覚え書 (5)

小田深山の *Pidonia* 属

窪 木 幹 夫

四国山地の西部、高知県に接する小田深山は行政区画の上では愛媛県であるが、地理的気候的には高知県との関連が深く、笠取山(1562m)、雨霧山(1246m)、丸石山(1328m)等の山々に囲まれた四国山地南面の温暖湿潤な地域である。今回の調査は山口市在住の阿武邦夫氏と雑木毅氏によって標高1000m付近を中心に行なわれたものであるが、詳細な垂直分布調査は行なわれなかった。この地域は、堀川(1968)によって指摘されている通り、リュウブ、ヒメシャラ、アセビ、ソヨゴ等を標徴種とする中間針葉樹林帯である。この様な樹林帯は、モミヤツガによって代表され、ブナ林とカシ林の中間に出現する温帯性針葉樹林で、日本列島では関東地方以西の太平洋側に広く存在する。なお、各種 *Pidonia* はトチノキ、ニシキウツギ、サワフタギ等の花上から採集された。種々御教示頂いた阿武、雑木両氏に御礼申し上げる。

調査年月日：1972年5月28～31日。

調査地：愛媛県上浮穴郡小田町小田深山国有林(標高約1000m)。

1. *P. puziloi* (SOLSKY) フタオビノミハナカミキリ, 46♂♂, 30♀♀.
2. *P. yamato* HOYASHI et MIZUNO ヤマトヒメハナカミキリ, 5♂♂.
3. *P. shikokuana* HAYASHI シコクヒメハナカミキリ, 1♂.

本種は1957年 *P. shikokensis* として大林と林により高知県松葉川産の雄(18. v. 1953, 小島圭三採集)を type として記載された。しかし、*P. discoidalis shikokensis* CHŪJŌ et HAYASHI と homonym であるため、林により *shikokuana* の名が与えられた。小島・林(1969)によれば、本種は四国特産種とされているが、九州からの採集報告(天野, 1974, 北九州の昆虫, vol. 20, No. 1)があり、この記録や本種の系統的位置付けについては今後検討して行かなければならない。

4. *P. signifera* (BATES) ナガバヒメハナカミキリ, 24♂♂, 11♀♀.
5. *P. mutata* (BATES) ヒメハナカミキリ, 6♂♂.

本種は福島県南部の帝釈山塊を北限として西日本に広く分布する。原亜種は頭部上面、前胸の前後縁以外の中央部、後胸腹板と雄の第一、第二腹節の黒色部を除いて体は黄褐色で、上翅に basal band, apical band, sutural vitta をして、三対の lateral markings を持つもので四国、本州に分布する。本州の高山地帯には原亜種より体型が細く小さく、黒色部が退化し上翅に僅かに latero-basal marking だけが残り、雄の第一、第二腹節が黒色の ssp.

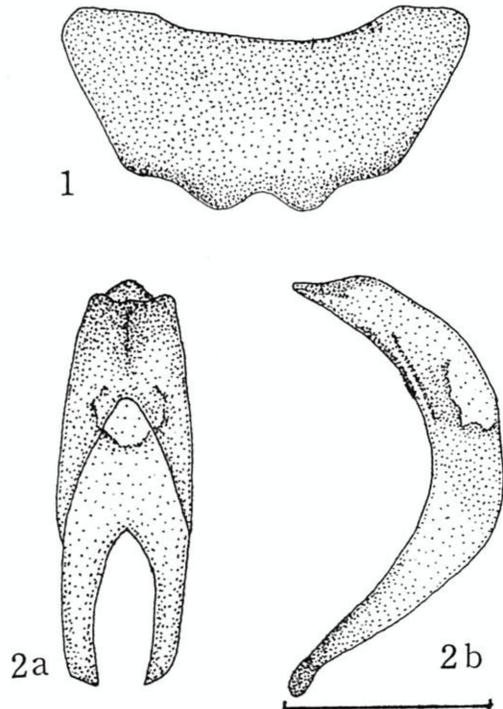
*pallida* が分布する。一方、九州の高地には原亜種に似るが大型で前胸の突出が鋭く、上翅の sutural vitta が小楯板の後方で消失する ssp. *kyushuensis* が分布する。

林(1972)は、四国において本種は標高1900m付近の高地帯に7月下旬ごろ出現し、6～7月ごろ中山帯に出現する *P. shikokuana* HAYASHI との立体的分布は、季節的にも垂直的にも分離していると指摘している。しかし今回の調査によれば、本種の垂直分布は比較的低く中山帯にまで及び、季節的にも5月下旬ごろから出現し、*shikokuana* と同所性を示した。また九州の中山帯にも原亜種と一致する個体が分布しているので、ssp. *kyushuensis* との関係を検討して行かなければならない。

今回採集された個体は典型的な原亜種に一致するものであった。今後の参考のために、雄の末端節腹板と交尾器を図示する。

6. *P. muneaka muneaka* (TAMANUKI) ムネアカヒメハナカミキリ, 20♂♂, 3♀♀.

原亜種は、九州・四国・本州(白山山塊以西)に広く分布し、各地でかなりの変異がみられるので



第1図 ヒメハナカミキリ (scale=0.5mm)

1. 末端節腹板(♂); 2. Median lobe:  
a. 腹面, b. 側面。

今回採集された標本の特徴を記述する。雄雌とも前胸は赤褐色で側縁の突出は鈍い。小楯板は、前胸と同色である。雄の maxillary palpus 先端の外縁は突出し四角形を呈する。雌の上翅は黒色で外縁部が僅かに黄褐色で、雄のそれは黄褐色で黒色の斑紋には変異がある。特に latero-posterior marking は消失するものから、発達して前方の斑紋につながるものまであった。また、sutural vitta の幅も変異に富む。雌の末端節背板の後縁は弓状に湾入する。雄の末端節腹板の後縁中央は、やや幅広い三角形に弱くえぐられる。雄の median lobe はやや細く、強く湾曲し、先端突出部は幅広く単純に尖り節片化は弱い。体長：♂ 8.6~10.5mm, ♀ 9.8mm; 体幅：♂ 2.1~2.6mm, ♀ 2.7mm.

7. *P. discoidalis shikokuensis* (CHŪJŌ et HAYASHI), 2♂♂.

四国及び紀伊半島に分布する本亜種は、前種に良く似ているが下記の点で区別される。前胸は前後縁の黄褐色部を除いて黒褐色で、側縁の突出は鋭い。小楯板は前胸の前後縁部と同色である。雄の maxillary palpus は外縁が直線的で角ばらず三角形を呈する。雄の末端節腹板の後縁中央は、U字状にえぐられる。雄の median lobe はやや太く中央部に屈曲し、先端突出部は鉤状に曲って尖りやや強く節片

化する。

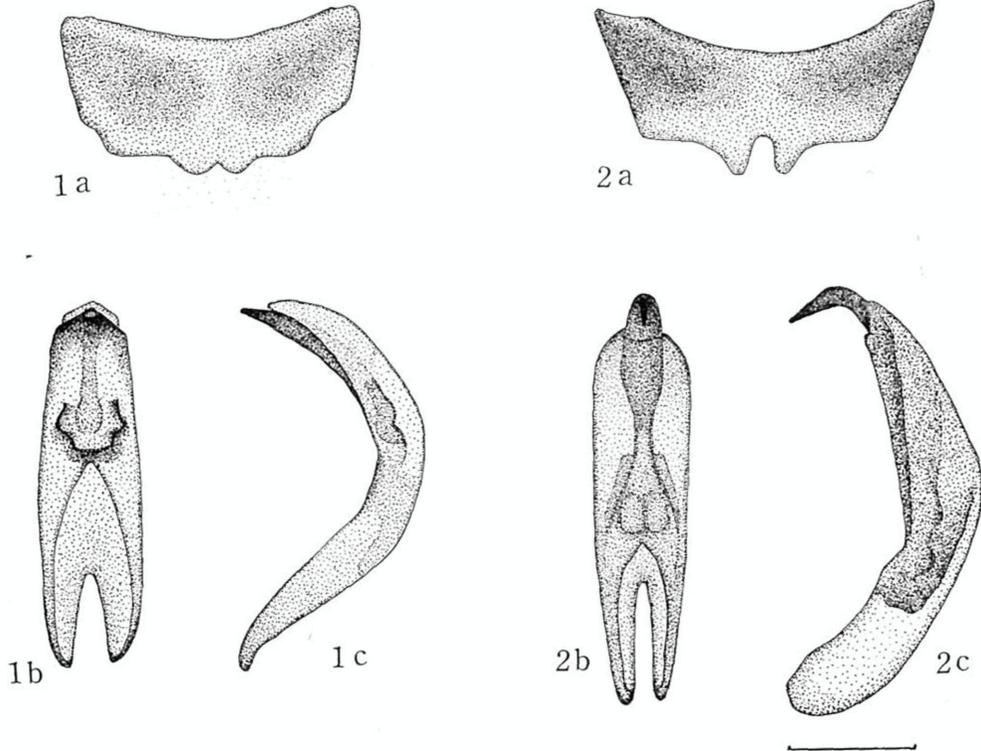
このように当地の *discoidalis* と *muneaka* の両種は雄の末端節腹板と median lobe の先端の形態により、明瞭に区別される。先に本誌で報告したこのグループの標本を検討すると、覚書(1) (Nos. 17/18) の *P. discoidalis*, 覚書(3) (Nos. 21/22) の *P. sp.*, 覚書(4) (Nos. 23/24) の *P. muneaka tamanukii* はすべて、雄の末端節腹板の後縁中央がU字状にえぐられ、median lobe の先端突出部が鉤状に曲るものに属していた。*P. discoidalis* は1901年日光の中禅寺産の雌に基づいて Picにより記載されているので、中禅寺湖畔より採集した3頭の雄(20. vi. 1971, 窪木幹夫採集)の標本を調べてみると、やはり上記のような特徴を備えていた。

これらの事から、本グループは種段階における新たな検討が必要であり筆者は上記の様な観点から今後各地の標本を比較検討して行きたいと思っている。

8. *P. grallatrix* (BATES) オオヒメハナカミキリ, 10♂♂, 6♀♀.

9. *P. simillima* OHBAYASHI et HAYASHI ニセヨコモンヒメハナカミキリ, 102♂♂, 64♀♀.

本種は九州・四国から北は本州北端まで広く分布する。当地の個体は、頭部背面・前胸・小楯板は雌雄とも黒色で、腹部は雌ではすべて黒色、雄では



第2図 ムネカアヒメハナカミキリとキベリクロヒメハカミキリ (scale=0.5mm)

1. *Pidonia muneaka muneaka* (TAMANUKI) 2. *Pidonia discoidalis shikokuensis* CHŪJŌ et HAYASHI  
a. 末端節腹板(♂), Median lobe : b. 腹面, c. 側面

多くは黒色で中には黒褐色から赤褐色へと変異が見られた。上翅の斑紋は、雄では比較的安定しているが、雌では黒化傾向があり、黒色部が発達し上翅に三対の黄褐色部分が残った ab. *hojimei* が 13 頭、さらに黒化し二対の黄褐色部分が残った ab. *masatsugui* が 1 頭見られた。

10. *P. amentata* (BATES) セスジヒメハナカミキリ, 8♂♂, 11♀♀。

11. *P. sp.*, 2♂♂, 5♀♀。

本種は従来 *P. miwai* (MATSUSHITA) と混同されて来たが、上翅の斑紋と交尾器・前胸・跗節の形態等で *miwai* と区別される。また生態的にも *miwai* はブナに代表される冷温帯落葉広葉樹林に、本種はモミ・ツガに代表される温帯性針葉樹林に分布し環境への反応を異にしている(窪木1974, 日本昆虫学会大会講演要旨)。なお、本種には四国の他、九州、本州の表日本地域のものが含まれる。

#### ○アシミゾヒメヒラタゴミムシ本州に産す

アシミゾヒメヒラタゴミムシ *Agonum (Europhilus) thoreyi* DEJEAN はユーラシアから北米の北部に広く分布し、日本では北海道から知られていた北方系の種であるが、本州で採集したので報告する。

1 頭, 1. v. 1973, 青森県岩木川, 筆者採集;

1 頭, 9. ix. 1973, 同上; 1 頭, 17. iii. 1974, 栃木県渡良瀬遊水池; 4 頭, 5—12. v. 1974, 同上, 同定ならびに御教示下さった田中和夫氏に御礼申し上げる。標本は筆者ならびに田中氏が保存している。

(東京都練馬区, 清水昭平)

#### ○ナガゴミムシの越冬 2 題

*Pterostichus* 属の越冬の様子については、平地性の種を除いてあまり知られていない。後翅を欠く山地性の種に関しては、*Eosteropus* 亜属のものが朽木中で越冬することが知られているが、他のグループではほとんど記録がない様である。筆者は地中性のチビゴミムシを採集する際に、次の 2 種のナガゴミムシの越冬を観察したので報告しておく。

1) *Pterostichus spiculifer ikutanii* TANAKA, 1♂, 23. iii. 1973, 神奈川県大山(標高約 600m), 筆者採集。

本種は大山の下社附近の日当りのよいガレ場で採集された。越冬場所は風化した岩や落葉などが堆積した状態で、地表より 30cm 位の深さであった。しかし非常に乾燥した場所で、越冬にはあまり条件の良い所ではなさそうである。

2) *Pterostichus macrogenys* BATES, 1♂, 4. iii. 1973, 栃木県安藤郡奈良山(標高約 400m), 大川秀雄採集。

沢の水際の大きな石下より同行の大川秀雄氏が見つけたもので、杉林の中で昼でもうす暗い陰湿な所である。大雨などで増水すれば、たちまち水中に没してしまう程水辺に近く、この様な所で無事越冬できるのであろうか。同じ所から *Stomis prognathus*

12. *P. chujoi* OHBAYASHI et HAYASHI チュウジョウヒメハナカミキリ, 27♂♂, 5♀♀。

13. *P. debilis* (KRAATZ) チャイロヒメハナカミキリ, 19♂♂, 12♀♀。

以上のように小田深山からは 13 種の *Pidonia* が採集された。同地における *muneaka muneaka* と *discoidalis shikokuensis* の同所性は阿武氏によって 1973 年 5 月 29 日に再確認されているが、この時には後者の雌が採集されなかった。また四国には、他に覚書 (3) (Nos. 21/22) で報告した、*P. ohbayashii breuningii* OHBAYASHI et HAYASHI が分布するが、今回は採集されなかった。従って今後は 6 月から 7 月上旬にかけての詳細な垂直的分布調査が必要と思われる。

なお、採集された総個体数は 418 頭、♂は 65%、♀は 35% であり、*simillima* (40%)、*puziloi* (18%) の 2 種が優占種であった。(東京農大)

BATES キバナガゴミムシも採集している。種の同定をお願いした田中和夫博士、および標本を頂いた大川秀雄氏に御礼申し上げる。(東京都港区, 森田誠司)

#### ○丹沢のジュンサイナガゴミムシ

本誌 Nos. 19, 20 (Jun. 1974) に奥村氏による *Pterostichus pachinus* BATES ジュンサイナガゴミムシの記録があるが、筆者も本種を神奈川県丹沢で採集しているので報告する。

1♀, 20. viii. 1971, 西丹沢, 玄倉 (380m);

1♂, 4. v. 1974, 物見峠 (500m)。

末筆ながら標本の同定をお願いした田中和夫博士に厚くお礼申し上げます。(東京都港区, 森田誠司)

#### ○屋久島のルイスツノヒョウタンクワガタ

1974 年 7 月 25 日、屋久島の黒味岳近くにある花江<sup>はなのえ</sup>河(海拔 1640m) で、オサムシ採集用の糖蜜トラップ<sup>トラップ</sup>にきたルイスツノヒョウタンクワガタ *Nigidius lewisi* BOILEAU 1 頭を採集した。

本種は主として暖帯林内の朽木中に生息する種類で、屋久島でも周辺部の低地にある林内では時々採集されているが、このような高所での採集例は全くない。屋久島の高所には積雪を見るような地域であり、花江河もその例外ではない。従って、本種が採集地点付近に生息するものならば、本種は冬期にある程度の積雪を見る地方でも生息が可能であることになる。

一方、花江河付近には生息出来ず、低地に生息していたものが、気流に乗って花江河にまで飛来し、それがトラップにきたものと考えても、本種の飛翔力は意外に強いと考えなければならなくなる。従って、本種の分布拡散の能力も意外に強いと推定しなければならなくなる。沖縄本島から佐多岬に至る本種の分布についての考察にも上記の点について考慮しなければならぬであらう。(仙台市, 渡辺 徳)

コガネムシ類の交尾器 endophallus の形態について

小林 裕 和

コガネムシ科の分類は、18世紀以来今日に至るまで多くの学者たちによって研究されてきた。そして、種の識別点として様々な形態が取り上げられてきたが、近年になってからは他の昆虫と同様、雄交尾器の形態が重要視されている。しかしながら、コガネムシ科において用いられている雄交尾器の形態的特徴としては、大部分が paramere の構造のみに終始し、それ以外の aedeagus や endophallus などの器官については、全くふれていない。

最近、オサムシに関して石川良輔博士 (1973, Bull. Natn. Sci. Mus. Tokyo, 16 (2): 191—215) は、endophallus に関する詳細な研究成果を発表され、endophallus の形態は属を区別するための有効な特徴として用いることが出来るという興味ある事実を指摘している。そこで、筆者もコガネムシについて従来ほとんど検討されたことのないこれらの形態が、どのようなものであるのかを調査し、この面から従来の分類体系を再検討しようと試みた。この研究は緒についたばかりで不十分な面も多々ある

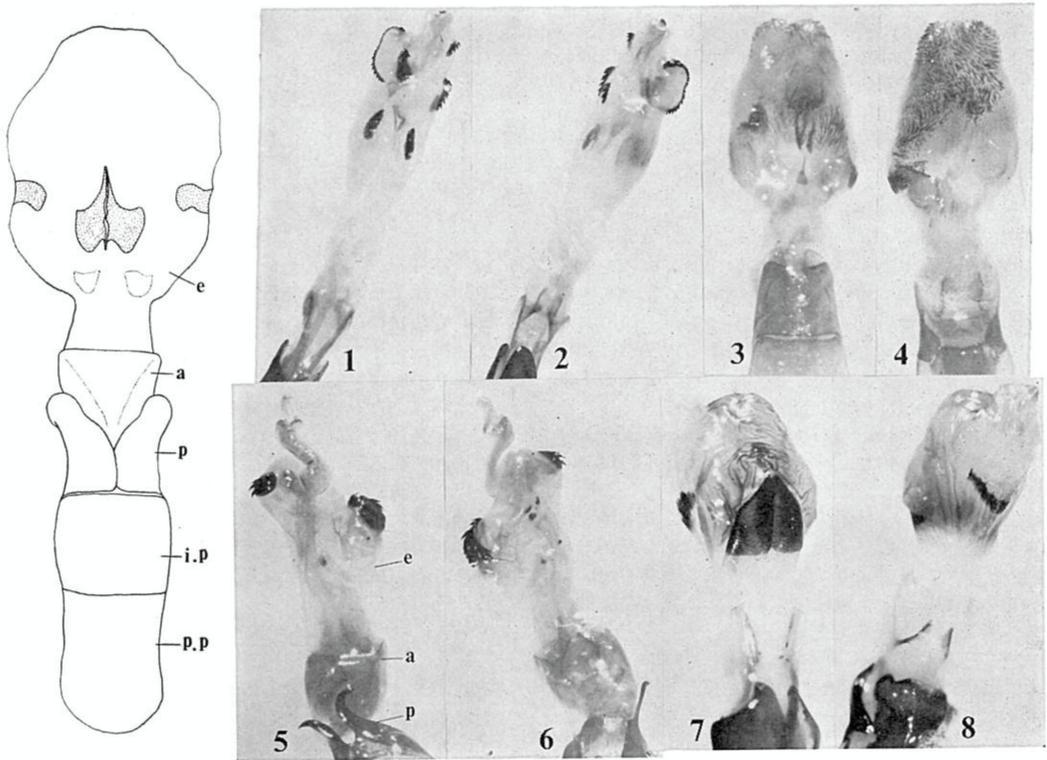
であろうが、これから数回に亘ってその結果を紹介し、御参考に供したい。

Rutelinae (スジコガネ亜科)

Rutelinae の中でも、ここでは特に我国に種類数の多い *Anomala* 属および *Mimela* 属の2つを取り上げて、それらのうち特徴的なものをいくつか紹介することにする。

Rutelinae では、通常交尾器先端の開口部から aedeagus (附図 a) が引き出される。この aedeagus は endophallus の部分に比べ膜質部が厚く、がんじょうであり褐色あるいは淡黄褐色であることが多い。さらにこの aedeagus の先端より endophallus (附図 e) が反転した状態で引き出される。endophallus は薄い膜質で、多くの場合白色でほとんど透明かあるいは淡黄褐色を帯びる。

反転された endophallus の表面 (時としては内面) には特有の構造が見られ、それらは種類によって異なっている。しかし、この構造には一定の類似性が認められ、その類似性によっていくつかの型に



左: 雄交尾器概略図 (*Anomala albopilosa*. アオドウガネ), a: aedeagus, e: endophallus, i.p: intermediate part, p: paramere, p.p: proximal part.

右: 1, 2. *Mimela testaceoviridis* キイロツヤコガネ, 3, 4 *Anomala daimiana* サクラコガネ, 5, 6. *M. costata* オオスジコガネ, 7, 8. *A. chloroderma* オオンマドウガネ, 1, 3, 5, 7 は背面図, 2, 4, 6, 8 は腹面図

分けることができる。本亜科に含まれる種について検討した結果では *Mimela costata* オオスジコガネ、*M. testaceipes* スジコガネ、*M. testaceoviridis* キイロツヤコガネなどの様に、強く硬化した堅固な節片を有するもの (図1, 2, 5, 6), *Anomala chloroderma* オオシマドウガネ、*A. xanthopleura* リュウキュウドウガネ、*A. triangularis* サンカクスジコガネの様なある程度節片化された部分があるが、堅くなく柔軟性を持つもの (図7), *A. albopilosa* アオドウガネ、*A. rufocuprea* ヒメコガネ、*A. cuprea* ドウガネブイブイなどの様に前者よりさらに硬化の程度が弱く、微細な毛によって着色さ

### ○八重山諸島産ハナムグリ3種の記録

#### 1. オオシマハナムグリ *Protaetia exasperata* FAIRMAIRE

吐噶喇列島、奄美諸島から沖縄諸島にかけて産し、島ごとに異った亜種に分化している。吐噶喇列島以北では口永良部島から1亜種が記載されているが、屋久島、種子島には日本本土と共通のキョウトアオハナムグリ *P. lenzi* HAROLD が代置種として産し、本種の記録はない。また八重山諸島からも未だ確かな記録がないが、私の手許に下記の標本がある。

1♂, 小浜島, 10. vi. 1969, 楠井善久採集; 1♂  
1♀, 石垣島平野, 30. viii. 1965, 有田 豊採集。

不思議なことに小浜島産は奄美大島産の原名亜種 *exasperata* FAIRMAIRE, 1898 に一致するものであるのに、石垣島産は ♂♀共に沖縄本島産の亜種 *satoi* NAKANE, 1956 に一致するものであった。同じ八重山諸島内でありながら、一方は奄美大島のものと同じもので他方は沖縄本島のものと同じと云うことは、同諸島に元来土着していた自然分布種ではない証拠であろう。次の2種も沖縄本島と全く同一亜種であり、その原因としては人為的要因以外には考えられない。

#### 2. オオリュウキュウハナムグリ *Protaetia lewisi* JANSON

すでに石垣島からの記録があるが、西表島からの記録はない。

1♂, 西表島古見, 20. vi. 1974, 浜野栄次採集。  
金緑色の美しい個体で、沖縄本島産の原名亜種と全く変りがない。

#### 3. リュウキュウハナムグリ *Protaetia pryeri* JANSON

本種も八重山諸島からの記録がない。私の手許に下記の標本があるので、古い標本で詳しい産地が判らないが、記録しておく。

2♀♀, 石垣島, 7. vii. 1941, 森下和彦採集。

2頭とも沖縄本島産の原名亜種に一致する。

(国立科学博物館, 黒沢良彦)

### ○アカモンオオモボトシテムシの後の採集記録

アカモンオオモボトシテムシ *Diamesus osculans* VIGORS は昨年 (本誌 Nos. 19/20), 黒沢良彦博士が石垣島パンナ岳頂上で採集された1♀に基

れたように見える部分を有するもの (図8), さらに、*A. daimiana* サクラコガネ、*A. geniculata* ヒメサクラコガネなどの様に明瞭な刺毛によって表面が被われるもの (図3, 4), などの型に代表される。しかしながら、いずれの型のものもそれぞれの移行型やいくつかの型が同時に出現することなどから、必ずしも明瞭に上述のような型を設定することには無理が生じるが、ここでは一応説明の都合上、上述の4つの型に区別して紹介することにする。また、これらの型に含めることの出来ない、いくつか独特なグループも存在しているが今回は紙面の関係上、割愛する。(東京農大)

づき、本邦からの初記録として報告されたが、筆者の友人である田村 修氏は1974年に石垣島ヘギナにおいて、本種を2頭採集しているため報告する。

1♂, 1. iv. 1974, 熱帯研究所の圃場にて死骸を拾う; 1♂, 15. ix. 1974, 同圃場のライト・トラップに飛来。

なお、上記標本は同氏の好意により、筆者が保管している。(和歌山県楠本中学校, 的場 績)

### ○オキナワスジゲンゴロウ屋久島での記録によせて

かつて、筆者(1961)は日本のスジゲンゴロウ *Hydaticus vittatus* (FABRICIUS) に2型のあることに気が付き、東南アジア・オーストラリアなどの記録を含めて再検討し、この類を6種に分け、幾つかの亜種や変種を認めた。その折、一部では標本の少ないこともあって、琉球列島におけるオキナワスジゲンゴロウ *Hydaticus lenzi lenzi* (SCHÖNFELDT) は宝島以南に分布し、スジゲンゴロウは中之島以北とトカラ群島の南北で分布を分けていると考えた。しかし、この度黒沢良彦博士のご好意で、渡辺 徳氏が1973年7月16日屋久島永田で採集されたオキナワスジゲンゴロウの標本(1♀)を検査することができたので、ここに新分布として報告したい。屋久島からは、スジゲンゴロウがすでに記録されているので、ごく近縁の2種が同時に分布することとなった。この2種の分布の重なりは、インドから日本(琉球列島を除く)にかけて広い分布圏をもつスジゲンゴロウに対して、オキナワスジゲンゴロウが亜種を異にしながら台湾、ネパール、インド南部などで記録されている。他の近縁種の分布および分化から推定すると、オキナワスジゲンゴロウがスジゲンゴロウの分布圏へ分化しつつ侵入したのではないかと考えられる。さらに、オキナワスジゲンゴロウの鹿児島での標本に対して、筆者は外国人による記録をデータ不明確をも加味してミスラベルではないかと推定して報告したことがある。しかし、屋久島の標本を検査するに当たって、その推論は誤っていたのではないかと考えざるを得なくなったようでもある。

このように、分布上興味ある標本を記録する機会を与えられた黒沢・渡辺両氏に厚くお礼申し上げる。(名古屋女子大学, 佐藤正孝)

### ○カクネムツボシタマムシの新産地

カクネムツボシタマムシ *Chrysobothris chryso-stigma* (LINNÉ, 1758) はヨーロッパからシベリアを経て、樺太、朝鮮(北部)、満洲、モンゴル、中国(北部)にかけて広く分布する種類で、日本領土内では北海道に特産亜種 *yezostigma* Y. KUROSAWA, 1963 を産するが、本州以南から記録はなく、北海道でも渡島半島からの記録を欠いている。しかし、筆者は青森県で本種を採集しているので、本種が北海道ばかりでなく、本州にも産することを報告する。

1 ♀, 青森県西津軽郡岩崎村向白神山, 9. viii. 1973, 阿部 東採集。

なお、標本は種名を同定して頂いた黒沢良彦氏の手許にある。(青森県五所川原市, 阿部 東)

### ○伊豆諸島のタマムシ 4 種

今まで伊豆諸島からのタマムシ類の記録はあまり見当たらないが、最近筆者は 4 種の未記録種を検したので、ここに記録しておく。これを書くに当り、国立科学博物館の黒沢良彦博士と標本を提供して下さいの諸氏に対し深謝する。

#### 1. *Chrysobothris succedanea* E. SAUNDERS

ムツボシタマムシ

1 ♂ 1 ♀, 御蔵島川田, 18~21. vii. 1974, 下村 徹採集。

本種は黒沢博士により 1963 年三宅島より報告されているが(原色昆虫大図鑑 II), 御蔵島からの記録はない。日本各地産の個体に比し、前胸背の赤味が強いが(特に ♀), 外部形態及び雄交尾器には差異がないようである。

#### 2. *Coraeus rusticanus* LEWIS ルイスナカボソタマムシ

1 ♂, 大島, 5. vi. 1971, 小岩屋敏採集; 1 ♀, 神津島, 17. vi. 1973, 高桑正敏採集; 1 ♀, 三宅島三池, 7. vi. 1974, 五味玉樹採集; 1 ♀, 御蔵島里, 10. vi. 1964, 五味玉樹採集。

伊豆諸島産は点刻が弱く、♀が強く唐金色を帯びるので、亜種 *fujiyamai* Y. KUROSAWA として区別されている。なお神津島産の個体はオオバヤシヤブシの叩き網で得られた。

#### 3. *Nalanda rutilicollis* (OBENBERGER) ムネアチビナカボソタマムシ

1 ♀, 御蔵島川田, 21. vii. 1974, 下村 徹採集。

黒沢博士により三宅島より報告されているが(甲虫ニュース Nos. 15, 16), 御蔵島からの報告はない。

4. *Agrilus yamaoakii* Y. KUROSAWA コクロナガタマムシ 1 ♂, 御蔵島里, 22. vii. 1974, 下村 徹採集。

本州、四国、九州に分布し、九州には比較的多産するようである。現在まで伊豆諸島を含め、関東地方周辺からの記録を筆者は知らない。念のため、御蔵島産の個体を九州英彦山の個体と比較したが、外部形態及び雄交尾器には形態的差異は認められなかった。(横浜市磯子区, 秋山黄洋)

### ○ツシマムツボシタマムシ九州に産す

ツシマムツボシタマムシ *Chrysobothris tsushimae tsushimae* OBENBERGER は対馬と近年本州から記録されているが九州からの記録はなかった。筆者は大分県九重山で本種を得ているので記録する。

2 ♂ ♂, 大分県九重山飯田高原, 30. vi. 1974.

本種を採集した飯田高原一帯は、カシワ、クヌギ、ミズナラ等の矮化した疎林が多く、他所では少ないムモンベニカミキリ、ヨツボシチビヒラタカミキリ、チャバネクロツツカミキリ等が多産する。植生が貧弱であるうえに単純なため産する甲虫類は少ないが、上記のように一部の種に多産現象がみられる。最後に、同定して頂くと共に記録の発表を奨められた秋山黄洋氏に深謝する。(福岡県粕屋郡, 入江平吉)

### ○ルリクワガタとコルリクワガタの分布

私が 1969 年にコルリクワガタ *Platycerus acuticollis* Y. KUROSAWA を記載した時には、標本を見ることが出来なくて、ルリクワガタの分布は本州だけ、コルリクワガタの分布は本州と九州を挙げておいた。しかし、その後、佐藤正孝氏の御好意で四国産、野村美之氏、天野昌次氏及び直海俊一郎氏等の御好意で九州産の両種を確認することが出来たので記録しておく。

#### 1. ルリクワガタ *Platycerus delicatulus* LEWIS

1 ♂, 2 ♀ ♀, 愛媛県石鎚山, 11. iv. 1966, 八田耕吉採集; 1 ♂, 福岡県英彦山深倉, 5. v. 1960, 天野昌次採集; 1 ♀, 同, 7. v. 1961, 天野昌次採集; 1 ♀, 椎矢 峠, 1. vii. 1973, 直海俊一郎採集。

#### 2. コルリクワガタ *Platycerus acuticollis* Y. KUROSAWA

1 ♂, 愛媛県 小田深山 Ogamiyama, 10. v. 1970, Haneda 採集; 1 ♂, 1 ♀ 愛媛県石鎚山, 29~30, x. 1864, 大林延夫採集; 1 ♂, 4 ♀ ♀, 熊本県国見岳, 29. iii. 1972, 直海俊一郎採集; 1 ♂, 同, 2. iv. 1972, 直海俊一郎採集; 1 ♂, 同, 20. v. 1973, 直海俊一郎採集; 1 ♀, 同, 13. iv. 1972, 直海俊一郎採集; 1 ♂, 熊本県市房山, 27. iii. 1971, 直海俊一郎採集; 2 ♂ ♂, 同, 3. iv. 1973, 直海俊一郎採集。

このうち英彦山産のルリクワガタ ♀ は肢が全部黒色の型であった。

さらに驚くべきことは、コルリクワガタの分布が一躍日本から朝鮮に拡大したことである。佐藤正孝氏と名城大学の有田 豊氏の御好意で検した標本の中に次の一頭があった。

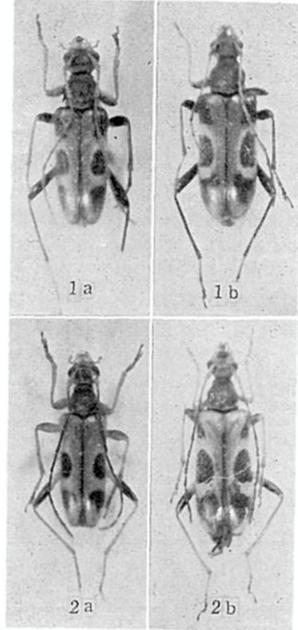
1 ♂, Kangwon-do, Shinhung-sa, Mt. Soraksan (雪岳山), C. Korea, 24. iv. 1974, S. Teramura 採集。

日本産と較べ顕著な差がないが、各脛節が全部黒色である。この様な個体は日本産の標本の中にはまだ発見したことがないが、同属のルリクワガタ *P.*

*delicnatulus* LEWIS やヨーロッパリクワガタ *P. caraboides* LINNÉ などの変異から見ると、当然本種にも現れるべき変異であるので、地方的な変異ではないと思う。(国立科学博物館, 黒沢良彦)

○クロヨコモンヒメハナカミキリの群馬の記録

本種は小池 寛氏(1971, 昆虫学評論, 23(1):25-27)により新潟県苗場山を模式産地として記載されたが、その後の記録がなく、新潟県のみがその分布地として知られているにすぎない。しかし筆者等は



1. *P. hayashii*.  
2. *P. insuratata* : a. ♂; b. ♀

群馬県朝日岳連峰清水峠(1400—1500m)産の多数の標本を検したので、ここに報告する。

3♂♂ 3♀♀, 26. vii. 1972, 鈴木 亘採集; 2♂♂ 3♀♀, 28. vii. 1972, 鈴木 亘採集; 4♂♂ 3♀♀, 3. viii. 1974, 武本庄司採集。

また、栃木県日光地方には、本種に近縁の *P. insuratata* (Pic) ヨコモンヒメハナカミキリがごく普通に分布しているが、上記の場所で同時に採集された個体の中には全く含まれていなかった。なお貴重な資料を提供して下さい

武本庄司氏に厚く御礼申し上げます。

(東京農大, 斎藤秀生・鈴木 亘)

○フジヒメハナカミキリの富士山以外での記録

フジヒメハナカミキリ *Pidonia fujisana* OBIKA et KUSAMA は 1970 年に表富士で発見されて以来、富士山周辺地域の調査が進められて来たが、その結果下記の下記の二カ所で採集されたので記録しておきたい。

5♂♂, 1♀, 静岡県安倍峠, 25. vi. 1972, 露木繁雄他採集。

露木, 木村欣二, 松本忠之および高桑正敏の4名で採集に行った際に、ミズキ, ヤブデマリなどの花上から採集された。当日は雨が降ったり止んだりの天候であった。一週間後の7月1日に再度同地を訪れたが、快晴であったにもかかわらず、本種は1頭も得られなかった。

2♀♀, 神奈川県丹沢山塊, 同角の頭(標高約1,480m), 27. vi. 1971; 1♂6♀♀, 同, 棚沢の頭(標高約1,350m), 9. vi. 1974; 5♂♂, 同, 棚沢

の頭, 16. vi. 1974, 以上全部露木繁雄および鈴木和利採集。

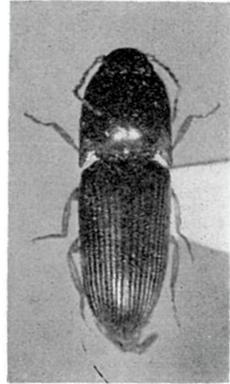
1974年6月16日採集の際には、熊木沢出合～棚沢の頭～蛭ヶ岳～白ヶ岳～検洞丸～同角の頭～大石山～幽神のコースを通ったが、真夏のような晴天で、天候が良すぎたためか、途中数カ所に好環境の場所があったが、棚沢の頭付近以外では本種を見出すことが出来なかった。

以上の2例によって、本種の分布地域は南アルプス南部と丹沢山塊にまで拡大されることになったが、両地域のものは、♂♀共に原産地の表富士のものと比較しても、差異は見出せなかった。

(神奈川県逗子市, 露木繁雄; 神奈川県藤沢市, 鈴木和利)

○石垣島でのトラップ採集で得られたコメツキムシ

沖縄県石垣島平喜名(ヘギナ)において、1974年4月に、熱帯農業研究所の、田村 修氏は糖蜜トラップによってコメツキムシ3種を採集され筆者に恵与されたのでここに記録する。トラップは同年4月5日に設置し、8日に回収されたとのこと。同定、及び標本の写真撮影をお願いした大平仁夫博士、また貴重な標本を恵与された田村 修氏にお礼申し上げます。



1. *Colaulon (Cryptolacon) miyakoensis* OHIRA, 1969 ミヤコヒメサビキコリ 7頭
2. *Meristhus (Rismethus) scobinula* CANDÈZE, 1857 ケシツブスナサビキコリ 8頭。  
体長2.5~3mm位の微小種で、普通は海岸や川原等の砂地で採集されている。
3. *Prodrasterius erabuensis* KISHII, 1966 エラブミナミチビコメツキ(写真参照) 18頭。

同地ヘギナで、田村氏により灯火でも得られている。(和歌山市, 平松広吉)

＜紹介＞

中国山脈東端の昆虫相

奥谷禎一：東中国山地自然環境調査報告。pp. 173~233, 1974。

近年、自然環境保全の重要性が強く叫ばれ、その為の基礎的調査が日本各地で行われている。そして多くの精度の高い調査結果が公表されつつあるが、このような情勢は昆虫類に強い関心を持つ我々にとっても極めて喜ばしいことである。

「東中国山地自然環境調査報告」は調査団長の奥谷禎一博士によって、「昆虫と自然」9(13):3誌上で、既に紹介されているが、細かな内容にまで言

及する余裕がなかった為か項目にのみに終始している。しかしその中には昆虫類の分布に関心を持つ同好者が見逃してはならない「中国山脈東端の昆虫相」が集録されているので、ここに紹介することにする。

本論文は兵庫県西北部の氷ノ山・後山・那岐山国定公園地域で採集された昆虫類と従来記録種とを併せた全昆虫類を目録に編纂し、分布上注目すべき種類の紹介をするだけにとどまらず、一度消滅してしまった昆虫類は二度と再び出現することはない自然の摂理を強調し、この地域の自然破壊に警告を与えている。

集録された昆虫類は全て専門家によって同定され、種名まで確実に判明したものだけに限定されているが、その総数は2,392種に達している。しかもその中の半数以上の1,412種(総数の約59%)は甲虫類によって占められ、この地域の甲虫相の概要を概観することが出来る。比較的種類数の多い科を拾うと、ゴミムシ科91種、ハネカクシ科64種、コガネムシ科86種、タマムシ科49種、コメツキムシ科56種、ケンキスイ科38種、テントウムシ科35種、ゴミムシダマシ科37種、カミキリムシ科201種、ハムシ科173種、オトシブミ科39種、ゾウムシ科124種で、全甲虫の中ではカミキリムシ科の種類が最も多い。また現在までの知見に基づき甲虫類の中で、この地域が分布の西限となっている種12、東限となっている種2、北限となっている種5の合計19種をあげているが、その中の10種もカミキリムシ科によって占められ、この科の調査がかなり入念になされたことを物語っている。いずれにしても、この地域の昆虫相はかねてから同好者により強い関心が寄せられていたにも拘らず、現在までまとまった報告書がなかったもので、長い間この様な報告が待ち望まれていた。本報告書はその期待に応える貴重な文献といえよう。本書で気がついたことは古い記録に基づいて集録されたと思われる種の中には、その後学名が変更されたものがあり、新旧両学名のもがそれぞれ独立種として二重にリストアップされていることである。このことはいかに完全なこの種の報告書の作成が困難であるかを感じさせるが、この様な例は極めて例外的なもので、このことによって本書の価値が減るものではない。とかく、一地域の昆虫相の報告は単なるリストとして蔑視されがちであるが、それを取りまとめ公表するには実に多くの労力と貴重な時間に裏打ちされた知識の集積が不可欠の条件であることを忘れてはならない。最後に本報告書の取りまとめの労をとられた奥谷慎一、高橋寿郎両氏をはじめ調査の実施に当たられた兵庫昆虫同好会々員諸氏の努力に対し、心から敬意を表するものである。(東京農大、渡辺泰明)

昭和49年も瞬時にして過ぎ去った感がありますが、会員の皆様方には新知見の発表等多くの収穫を得られましたこととお慶び申し上げます。

さて、本会の活動も「甲虫ニュース：17/18号」で御約束した様に順調な軌道に乗せることができました。これもひとえに会員諸氏の熱意と協力の賜物と深く感謝致しております。本年度もこのペースを崩さず、より以上の発展を期しておりますので今後共一層の御支援を御願ひ申し上げます。

#### ◇活動報告

第1回例会 昭和49年4月21日、於：国立科学博物館(上野)アジアのウバタマムシ属：黒沢良彦(科博)。第2回例会 昭和49年6月29日、於：国立科学博物館分館(大久保)琉球および台湾に分布するイシガキコガネ種群について：小林裕和(東京農大)。第3回例会 昭和49年9月21日、於：国立科学博物館(上野)フタオビノミハナカミキリとニセフタオビノミハナカミキリの分布様式：窪木幹夫(東京農大)。特別集会 昭和49年9月29日、於：岩手大学厚生会館会議室、「甲虫ニュース23/24号」参照。第4回例会 昭和49年12月22日、於：国立科学博物館(上野)幼虫の生態・形態からみたヒラタムシ上科：林長閑(法政二高)、なお例会終了後、有志により恒例の忘年会が「鳥正」で行われた。

#### ◇会計報告

収支決算報告(昭和49年12月31日現在)

収入の部		支出の部	
前期繰越	1,650	印刷費(ニュース17/18~23/24)	267,805
会費	262,000	通信費	29,100
広告費	40,000	事務費	14,542
バックナンバ一売上	14,970	特別出版物発行引当金	150,000
寄附金	195,650	次期繰越	54,719
預金利子	1,896		
合計	516,166	合計	516,166

(世話人一同)

#### 甲虫談話会

会費(1カ年)1000円、次号は6月中旬発行予定、投稿メ切は5月15日。

発行人 黒沢良彦  
発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園  
国立科学博物館動物研究部内  
電(364)2311、振替東京60664

甲虫談話会會員名簿

(昭和50年2月1日現在, A B C順)

氏名	郵便番号	連	絡	先
----	------	---	---	---





